❶～❾ どこを切り取っても面白い街

太森愛子と世界で遊ぼう！

9

旅行好きのソムリエが、世界のあっちこっちから
死ぬ前に一度は見ておくべき町を厳選してご提案します。
私があなたの次の旅をもっとわくわくさせますよ！

リシケシ、そしてデリー

グローバリゼーションが進んだ結果、都市は均一化され、今や言語の問題さえクリアできれば世界の主要都市は見分けがつかない。着信音は世界共通。ＬＩＮＥで連絡を取り合い異国のスタバで待ち合わせてラテを頼む。そこに新鮮さはない。ｉＰｈｏｎｅ片手にマクドナルドで時間をつぶすなら世界中どこにいてもできるから。

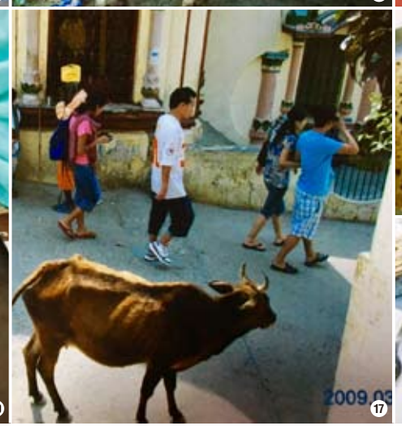
そんな時代に想像もできない全くの異文化を体験できる場所があるとしたら、それはもうインドしかないのではないか。

私は二十歳そこそこで、世の中に怖いものなんて何もなく、興味本位でヨガの聖地リシケシに向かった。リシケシは首都デリーよりさらに北、ヒマラヤの麓の小さな町。ビートルズが１９６０年代にヨガの修行に訪れたとあってこの地を目指す人々の目的はヨガを学ぶことにある。希望者はアシュラムと呼ばれるヨガ道場に滞在することができ、24時間ヨガの教えに基づいた生活を送ることが

できる。朝は5時に起床ベルがなり、一時間のメディテーション(瞑想)。日中は各自スケジュールに基づいたヨガレッスンを受け、10時に消灯という求道的な日常。

まぁそんなストイックな生活を送れるはずもなく、私は大方の時間リシケシの町をただぶらついていた。ぶらつくといっても目ざといインド人が異国人をゆっくり散歩させてくれるわけもなく、しつこい物売りやバクシーシをねだる物乞いの手を振りほどきながらの町歩き。ペットボトルの水一本買うにしても値段や釣り銭を誤魔化され、そりゃ高すぎる、まずペットボトルの蓋が開いているじゃないか(空いた容器に適当に汲んだ水を入れて販売している)と、ほとほと骨が折れる毎日。インドでは比較的安全、清潔とされるリシケシでさえそのような状態、首都デリーともなると、道のわきには数日前まで息をしていただろう人間の形のかたまり、病気の犬、それを啄む鳥、エサを求めてうろつく野良牛が乱雑に群れている。しかしそんな状況だと人間は本当にたくましくなれるものだなと実感できたのも事実で、始めは手足のない物乞いや、赤ん坊を抱いて1ルピー1ルピーとねだる7~8歳の少女に同情していたはずが、日が経つにつれ、こっちだって生きていかなきゃいけないんだ、付き合ってられるかという気持ちが芽生えだす。神のご加護を、と手渡される花を突き返し(あとで小銭を要求されるから)、片足の子供にあっち行きなと平気で怒鳴る。そうやって非道な振舞いを身に付けた自分に嫌悪感を覚えるようになる。生命力に追随する自分の醜さに直面させられるのだ。私はたまたま日本という秩序を重んじる清潔な国に生まれただけで、もしインドで生まれたならどのような生活を送っていたのだろう。もしこの国で育ったなら、彼らと同じ環境で生きていかざるを得ないなら、私だって自分が生き残るために人を騙すだろうし、物を盗めるだろう、死にたくないがために他人の命を脅かすだろう。騙されただの盗まれただの、どうして私が彼らを責めることができるだろう。もともと腐った人間なんていない、ただ環境が腐っているのだ。そう考えると次第に彼らの逞しさに畏怖の念を覚えるようになる。何が何でも明日の糧を手に入れようとする人間の生命力は、極彩色を帯び、ギラギラと輝いていた。自分の想像を越える景色は何故こうも感動的なのか。インドの町は刺激的なんて言葉では到底足りないほどに衝撃的だった。

もしあなたが何かに悩んでいて、かつ体力に自信があるのならば、インドという経験を是非。まず間違いなく些細な悩み事なんて吹っ飛んでしまうだろう。次々に押し寄せる目の前の異常事態に対処していくうちに、今まで現実だと思っていた世界への見方が変わっていく。その時々で最有力だと思われる判断を瞬時に下さなければ他人に利用されるだけだ。それらはもはや判断でも選択でもなく、反応でしかない。瞬時の反応の繰り返しの中で、否が応でも自分の器が暴かれる。極彩色の強烈な世界に圧倒される人と、もう二度と行きたくないと感じる人と極端に分かれる国。けれど必ず、ガイドブックには載っていない個人的な体験ができる国、インド。



⑩ アシュラムでのヨガ
⑪・⑫ どうせすぐ乾くからいいや、と洗濯物は庭に放り投げて乾かしていた私…。人はどんな状況にでもすぐ慣れる。
⑬・⑭ カレー以外のものを食べた記憶がない。帰国して一番食べたくなったもの、日本のカレー。
⑮~⑰ 人と共生する野良牛
⑱~⑳ 人の顔に生命力を感じる